

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二四年二月一日（午前）実施

国語問題

（五〇分）

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- ① 眼鏡を新調する。
- ② 食器を傷めないやわらかい布。
- ③ 時を刻む。
- ④ りんかいの工業地域。
- ⑤ きし回生の一手で逆転勝ちした。
- ⑥ 人のいとなみを記録する。
- ⑦ 葉先から水がたれる。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

生物としての人間は他の個体と協力することによって大きな社会を作り出しました。さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか。

人間の協力性を可能にしたのは、人間のもつ「共感能力」だと言われています。つまり他の人の気持ちになって考えられるということです。これによって他者の望むことを察知し、協力関係を築くことができます。この共感能力は人間が増えることに大きく貢献しましたが、最近の傾向として、この共感能力は人間のなかでますます強化されてきているように思います。つまり人間はどんどんやさしくなっています。

近年、ウシやブタなど動物の肉を食べることにについてしばしば問題視されるようになってきています。食肉の問題のひとつは温暖化などの環境負荷が大きいことだと言われています。たとえば100gのタンパク質を生産するのに、大豆であれば2.2㎡で済むところを、ウシを放牧した場合は164㎡と70倍以上の広い土地が必要になります。また冗談のような話ですが、ウシのゲップはメタンを含んでおり、このメタンが大きな温室効果をもたらしているとされています。

さらに食肉には倫理的問題があると指摘されています。私たちと同じほ乳類であり、ある程度の知能をもったウシやブタを殺して食べるのが許されるのかという問題です。私自身は肉が大好きですので、普段から何の疑問も抱かずにウシもブタも食べています。特に【*】感を抱くことはありません。ただ、それはよくよく考えてみると、【*】感を抱かなくて済むようなシステムができ上がっているからのように思います。

1、スーパーの肉売り場ではウシやブタの肉の切り身がきれいにパックされて並んでいます。そこに生物としての姿はもうありません。骨や血液、皮膚、毛、臓器など元の生物の特徴はきれいに取り除かれています。どこか人目につかない場所で生身の動物から肉を切り離す作業が行われています。マグロの解体ショーはよく見世物になっていますが、あれは魚だからまだ許されているように思います。ウシやブタの解体を見たい人はあまりいないでしょう。私たちは、自分と同じほ乳類を殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感を持っていることを示しています。

これは人間という生物の特性からすれば当然のことです。私たちは少産少死の戦略を極めた生物ですので命を大切にします。それも自分だけではなく、他の人の命も大切です。それは人間が大きな協力関係の中で生きているからです。私が生きて増えるためには、他の人

の協力が要です。したがって、人を殺すということには大きな抵抗感を持つようになるのは当然です。そしてこの抵抗感、人間以外の人間とよく似た生物、たとえばほ乳類などであれば（人間ほどではないにせよ）適用されてしまうようです。

これは仕方のないことのように思います。ほ乳類の体のつくりは人間とよく似ています。ネズミでも、体温、皮膚、骨、血管があり、切ると血が出ます。内臓もほとんど人間と同じセットがそろっています。ふるまいも人間と似ています。イヌやネコを飼っている人であれば、そのしぐさやふるまいに人間らしさを感じることも多いでしょう。人間の家族と同じように扱っている人も多いのではないのでしょうか。彼らは人間ではありませんが、やはり喜怒哀楽があり、好き嫌いもあり、可愛くて時にやさしさも見せます。そのような動物を殺して食べることに忌避感を持つのは当然のことでしょう。

ウシやブタも変わりありません。家でペットとして飼うことはあまりないのでよく知られていないだけで、牧場に行けば人懐っこいウシがいますし、ブタをペットとして飼っている人もいます。彼らにもきっと人間と同じような喜怒哀楽があることでしょう。むしろそうしたウシやブタの人間らしさを知らないおかげで、平気で食べることができているのかもしれないかもしれません。もし小型のウシやブタがペットとして広く飼われるようになったら、もう人間はウシもブタも食べられなくなるのではないのでしょうか。そこまでいなくても、自分が家族のように大事にしているイヌやネコと、今晚のおかずのウシやブタは同じ生物だと一度でも意識してしまうと、どんどん食べにくくなっていくように思います。実際に近年、動物食を控える選択をする人が増えているという統計結果もあります。私たちは少しずつ、他の動物へも共感の範囲を広げているように思います。

C この人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません。もともと人間が持っている共感能力は他人との協力を可能にしたことで人間の生存に貢献し、強化されてきたものです。したがって、他の人間への共感、世代とともに強化されてしかるべきです。

2、他の生物に対する共感、特に人間の生存には貢献していないように思います。私たちがどんなにイヌやネコに共感し、家族のように扱ったとしても、イヌやネコが人間の生存や子孫の数を高めてくれるようには思われません。過去の人類は、イヌは狩りのパートナーとして飼っていたようだし、ネコはネズミ捕りとして役に立っていたようですが、家族のように扱うよりは、飢餓時には食料として食べてしまえるくらいの距離感のほうが人間の生存には役に立ったはず。ましてやウシやブタに共感してしまったら、栄養価の高

い肉という食料が食べられなくなり、**3** 生存には不利益になりそうです。食料になりうる生物に共感してしまうことは「増えることに貢献する能力が強化される」という増えるものの原則に反しているように思います。

このような共感範囲の拡大の原因は、まさにこの共感能力のおかげで高度に効率化した現代社会にあると思われます。まず、過去の人間の社会と現代の人間の社会の大きな違いは、栄養を得ることは生存を決める要因ではなくなっていることです。2019年のデータでは、世界中で生産されている食料を世界の人口で割ると、平均して一人あたり毎日約2900kcalの食料に相当しています。成人男性でも一日に必要とするカロリーが約2600kcalですから、この値は世界中のすべての人間に必要な食料は生産できており、適切に分配さえできれば（これが難しいのですが）餓えて死ぬことはないことを示しています。

過去のどの時代においても、生物は必要な食料を得るために競争をしてきました。栄養が得られればその分だけ増えてしまうので、常に栄養は足りない状態になります。ところが現代の先進国においては、栄養は足りているにもかかわらず出生率は落ちているという、過去のどの生物にもありえなかった状況じょうきょうになっています。この特に栄養が余っているという状況をつくりだせたのは、他人どうして協力することができたからに他なりません。研究者が肥料を開発し、化学メーカーが肥料を作り、耕作に適した地域に住む人が作物を育て、輸送業者が消費者まで届けるといふ協力的体制により、食糧生産と分配を効率化できたことによりです。そしてこの協力的体制を可能にしているのが、他人との共感です。他の人が自分と同じように協力してくれるという確信があるから、分業が成立しています。

このように大成功した共感能力は、私たちの中で強化されつつあります。先に述べたように私たちは協力することで成功してきたので、ますます協力的に、やさしくふるまうように教育され、日常的にプレッシャーをかけられています。このやさしさを適用する範囲に線を引くことは容易ではありません。増えることに貢献するのは人間へのやさしさです。しかし、人間と同じように温かな体温を持ち、人間の幼児くらいの知能や体のサイズを持つイヌやネコが周りにいます。しかも、人間がかわいらしいと思うような外見を持っています。この生物に人間の持つ強い共感能力が発揮されてしまうのはやむを得ないことかと思えます。むしろイヌやネコといった愛玩動物※あいがんはそうなるように（人間の手も入りながら）進化してきていますとみなすことができます。

こうして、人間が共感する対象はイヌ、ネコなどのほ乳類に拡張されていきます。鳥もペットとして人気ですので、鳥にも拡張されていくでしょう。ほ乳類や鳥類が仲間だとみなすようになれば、次は爬虫類や魚類となるのは避けられないでしょう。みんな同じように目、鼻、口があり、よくみればかわいいと言えないこともありません。

現状で、日本では魚を食べるのがかわいそうという声はあまり聞かれませんが、しかし、日本ではよく見かける鯛の頭としばをそのまま使った活け造りも、冷静になってみると残酷に思えます。ほ乳類で同様なことは決してやらないでしょう。実際に海外の人から見ると活け造りは残酷な行為のように見られる場合もあるようです。そのうち活け造りやマグロの解体ショーが残酷なものだと敬遠される時代がくるかもしれません。〈中略〉

私たち人間は、昆虫や植物などの人間からは遠く離れた生物の命についても、ある程度は大事だと思っています。それは少産少死の戦略を極めて命が大事になり、かつ ^D やさしくなって自分以外の生物の命も大事になってしまった人間の宿命でしょう。私としては、この傾向が良いかどうかをとにかく言うつもりはありません。これは増えるために少産少死の戦略を極めた生物にとって必然だと思うからです。この傾向がづくのは、それが人間の増加に貢献してきたからです。そして、増えることに貢献しなくなるまでこの傾向は広がっていくはずはです。

〈市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』（ちくまりプリーマー新書）より〉

〔語注〕

※環境負荷……………人間の活動が環境におよぼす、悪い影響のこと。

※倫理的な問題……………人間が社会の中で守るべきこと（＝倫理）に関わる問題。

※少産少死の戦略……………筆者は、問題文として取り上げた部分の前の章で、生物は増えて子孫を残そうとするが、人間は、子どもを少なく産んで（少産）、様々な能力を得ながら大きくなり死にくくする（少死）という、ゆつくりと確実に増えていく戦略をとった、と述べている。

※忌避感……………ある物事や人物をきらって避けたいと思う感情。

※愛玩動物……………人間がそばに置いて大切にし、かわいがることを目的に飼う動物。ペット。

問四

自分と同じほ乳類を殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感を持っているとありますが、これはなぜですか。その理由について説明している次の文章の、【①】～【③】に合う言葉を入れ、文章を完成させなさい。言葉は【 】内の指定の字数で本文中からぬき出して書くこと。ただし、同じ言葉は一度ずつしか用いないこととします。

生物にとつては、子孫を残して増えることがもつとも重要です。人間は生まれる数が少ない代わりに、他者と【①(二字)】し合うことによつて増え続けてきました。それを可能にしているのが、元来人間が持っている【②(二字)】能力です。これは【③(五字)】を感じさせるほ乳類もその対象範囲となるので、ぼう線部の「抵抗感」につながることになります。

問五

人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません。について、次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 「やさしさの拡張傾向」とありますが、現代において「やさしさ」が「拡張」しているのは、現代社会がどのような状況になつたからだと筆者は考えていますか。本文の言葉を使って四十字程度で答えなさい。

(2) 「少し不思議ではありません」とありますが、筆者はどのような点を「不思議」だと感じているのですか。答えとしてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「やさしさ」は、大昔からほ乳類全体をその対象としているのに、今もなお人間がウシやブタなどを食べ続けている点。
- イ 「やさしさ」は、近年まで対象の範囲を急速に広げてきたのに、現在は倫理的な問題でその速度がおそくなっている点。
- ウ 「やさしさ」は、もともと人間の生存には貢献していなかったのに、拡張されて貢献するものへと変化をとげている点。
- エ 「やさしさ」は、人間が増えることと無関係な動物もその対象になっている点。
- オ 「やさしさ」は、時代と共に強化されるはずのものなのに、現代は人間同士が助け合おうとしない社会になっている点。

問六

D やさしくなって自分以外の生物の命も大事になってしまった人間の宿命 とありますが、あなたが知っている、人間以外の動物に対する人間の「やさしさ」が、社会的な問題になっている事例を一つ挙げなさい。ただし、「どのようなやさしさか」、「それがどのような影響をおよぼしているか」の二点を明確にして書くこと。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

白鳥双葉しろとりふたばは生まれつき目が見えず、視覚支援学校しけんがくに通う中学一年生である。小学生のときに晴眼者はるまな(目が見える人)の男性とぶつかり、転倒てんたうした際に心無い言葉をかけられ、白杖はくじょう(視覚障がい者が歩行時に周囲の安全を確認したり、困った時に周囲の人に合図を送ったりするための白い杖)を放り投げられたというできごとをきっかけに、外を歩くことが怖くなり、不登校ふとんがうになってしまった。また、宇佐美佑うさみたくはその視覚支援学校の同級生である。

梅雨はまだ明けていないのに、もう何日も真夏のような天気がつづいているそうだ。天気予報では熱中症ねつちゅうしやうに注意してくださいと、そればかりいつている。

双葉はカーテンの向こうに夏をイメージしながら、クーラーがきいた部屋でひとり、^A大きなため息をこぼした。きっかけは、ひさしぶりにスマホの電源を入れたことだった。

予想よすうはしていたものの、佑くんから何通もメッセージが届いていた。その中の一通が、「白杖歩行はくじょうほこうをがんばることに決めた！」というものだった。

もともと目が見えていたという佑くんは、はじめて出会ったころは、白杖がどんなものかも知らなかったくらいだ。どんどん外に出たいと好奇心旺盛こうしきしんおうせいだった双葉とは反対に、室内で遊ぶことを好んだ。何をやるにも、まずは双葉がやってみせた。それをたしかめてから、ようやくまねをするようなタイプだった。

そんな佑くんが白杖の練習をがんばっていると知って、双葉はあせりのようなものを感じた。もちろん、「がんばれ！」とエールを送ってあげるべきだと、わかっている。ただ、このまま佑くんが **1** 前へ進んでいってしまうような気がして、心細くもあった。

そういう気持ちをごちゃごちゃになったものが、大きなため息としてこぼれたのかもしれない。

「伴歩ばんぽ・伴走ばんそうクラブ」の井桁いげさんから母さんにメールが届いたのは、梅雨が明けてすぐのことだった。へ 中 略 1 へ

「今回は、親子でペアを組んでもいい」と、母さん。

井桁さんのメールによれば、駅に集合したら、ペアごとに海沿いのジョギングロードを通って、ゴールのお店まで行くそうだ。

「せっかくだから参加する？」

母さんにそうきかれた瞬間、双葉の頭にうかんだのは、佑くんからのあのメッセージだった。

——白杖歩行をがんばることに決めた！

あの佑くんが、白杖をがんばって練習している。

わたしは？

わたしだって少しくらい、がんばれることがあるんじゃないかな？

「いいよ。行こう」

双葉は、そのイベントに参加することを決めたのだった。

〈 中 略 2 〉

「では、準備体操を終えたペアからスタートということ！ 後ほど会いましょう」

井桁さんはそう話をしめくるや、さっそくペアのおじさんと走って行ってしまった。

母さんのガイドでスタート地点まで行くと、磯いそのにおいがいちだんと強くなった。

今日は、母さんのスカーフ※をキズナとして使う。

海沿いのジョギングロードを歩きはじめてすぐに、双葉は、あの日、久米くくめさんがいていたのはほんとうだったとわかった。母さんとにぎるキズナは、久米さんのときとはちがう動きをした。

この前よりも輪が大きいせいもあるかもしれない。手をより自由に動かせる分、母さんとリズムを合わせづらかった。そもそも、双葉と母さんでは、腕うでのひと振りふりにかなり差があるようだ。母さんが腕をふりきっていないうちに、双葉の腕はもう反対側へむかって動きはじめている。

B 何度か「せーの」で動きを合わせようとしたものの、すぐにバラバラになってしまった。腕がそろわないから、足も思うようにそろわない。もしかすると、あの日は、久米さんが双葉に合わせてくれていたのかもしれない。

しばらく歩いたところで、風のせいでぐちゃぐちゃになった前髪まえがみを直すと、指先が少しベタツとした。

すごいな。母さんは何でもお見通しだ。

双葉にはもうひとつ、気になっていることがあった。「目撃者」^{もくげきしや}だ。

あの日、何人もの人が、ぶつかる直前と、ぶつかった瞬間の、双葉とおじさんについて、おまわりさんに説明してくれた。

その人たちの話をききながら、双葉はおどろいてもいた。これだけの人が見ていたのなら、どうして、だれも、「あぶないよ」「前から人が来るよ」と、声をかけてくれなかったのだろう、と。

^E そのモヤモヤは、いまだにうすれはしない。

母さんに話してみようか迷ったものの、うまく話せる気がなかった。双葉はあきらめて、話題をかえた。

「もし、わたしの目が見えていたら……」

双葉はそんなふうがいいながら、どこよりも熱を感じるほうへ顔をむけた。

太陽、空、雲、海、風、おじいちゃんが育てている庭の草木に、夏の花火、水が押しよせたりひいたりするという波や、木漏れ日^{こも}なんかも見てみたいな。

「たくさん、いろんなものを見るんだ」

双葉は決意表明するみたいに、よく晴れている空にむかって 2 といった。

へ 中略 3 へ

けれど、担任^{たんになん}の松木先生との面談の日、双葉は、やっぱりもう少し休みたい、と切りだしていたのだった。

「まだ外に出るのはこわいかな？」

そんなふういききかえした松木先生の声は、とてもききとりやすかった。双葉には、松木先生が、あきれているわけでも同情^{どうじやう}しているわけでもなくさめているわけでもない、ちゃんとわかった。ほんとうのことが知りたいと思っっている人の、真剣^{しんけん}な声だった。

だから、双葉も正直に話すことに決めた。

「こわいと思っっていた時期もあったんですけど、今は、自信がないっていうか……」

双葉はそう答えてはじめて、自分の気持ちを整理できた気がした。

双葉が失くしたのは、外に出るための自信だけではないだろう。今までどおり晴眼者と接することが、とてもこわい。あのおじさんだけじゃなく、すべての晴眼者を信用できなくなっている。学校にいる先生たちがそういう人ではないことは、わかっている。きつと、佑くんも力になってくれるだろう。それでも双葉は、きちんと考えて、納得しないことには、一歩も前に進めない性格なのだった。

双葉が **3** と説明すると、松木先生はあたたかみのある声でこういった。

「双葉さんが自分で考えて、自分で決めたことなら、先生は応援したいと思います。ただ、お母さんはどうですか？」

「ふふふつ。先生とは気が合いそう。じつは、『自分のことは自分で』が、わが家のモットーなんですよ」

「まあ！」

とたんに生物室がにぎやかになった。母さんも松木先生も楽しそうだ。

双葉は、ふたりが今どんな顔で笑っているのか、とても気になった。

気になるといえば、もうひとつ。ひさしぶりにはいた上ばきのはき心地も気になっていた。足が大きくなったせいばかりではなさそうだ。上ばきに、何か入っている。

帰り際にたしかめると、なぜか葉っぱのようなものが入っていた。爪先側へ押しやられたせいで、ひびが入っている。

双葉は、家に帰ったらごみ箱にすてようと思い、スカートのポケットにしまった。その拍子に、葉っぱの表面に凹凸があることに気がついた。

もしかして、点字かな？

家に帰った双葉は、そおっと、ていねいに、自分の机の上にその葉っぱを広げた。

——げんき？

そこには、ひと言、そう書いてあった。

「佑くんなの？」

もし、こんなふう心配してくれる人がいるとすれば、小学部の六年間をいっしょにすごした佑くんしか思いあたらなかった。

そういえば、佑くんは筆圧が強かったな。いつも点筆が点字用紙をつきやぶって、凸面がつぶれていたっけ。

なつかしく思いだしながら、もう一度葉っぱにふれると、「げんき？」の四文字が、今度は佑くんの声で再生された。

佑くんからは、今もときどきLINEが届く。ただし、返事はしていない。ずいぶん長いあいだ無視してしまったので、次に返事をするときは、今まで話せなかったことをきちんと説明しようと考えている。ただ、そんなふうに思うせいで肩かたに余計な力が入るのか、何を書いたらいいかわからなくなってしまうのだった。

だけど、今回こそは返事をしよう。今まで返事をしなくてごめんねって、きちんとあやまろう。

それから何日かすぎたその日。双葉が朝食のロールパンに苺ジャムいちじこをはさんでいると、母さんが、今日は有給※をとって学校に書類を出しに行ってくるかと話した。

「わたしもいっしょに行つていい？ 学校の下駄箱げたばこまで、いっしょに行きたい」

双葉は、今だと思った。

佑くんへの返事を下駄箱に入れておこう。

〈櫻崎茜『手を見るぼくの世界は』（くもん出版）より〉

〔語注〕

※伴歩・伴走クラブ……ここでは、視覚障がいを持つ人と、その側について視覚障がい者に進む方向を伝えたり、物をよけたりしながら、一緒に歩く、または走る人を集めた、地域の活動グループのこと。

※キズナ……伴歩や伴走の際に、ガイドする人と視覚障がい者が安全のために共に持つ輪っか状のもの。

※久米さん……伴歩・伴走クラブに視覚障がい者を誘導ゆうどうするガイドとして参加している女性。

※点筆……点字を打つための道具。

※有給……有給休暇の略。賃金をもらいながらとることができる休みのこと。

問一

1 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア ぼつりぼつり
- イ ぐんぐん
- ウ まじまじ
- エ しみじみ
- オ きつぱり

問二

A 大きなため息をこぼした。とありますが、このときの「ふたば双葉」の気持ちを四十字以内でまとめなさい。

問三

B 何度か「せーの」で動きを合わせようとしたものの、すぐにバラバラになってしまった。とありますが、この状態を表す次の慣用句の [] にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

[] が合わない

問四

C 「気持ちいいね」それでも、双葉はそういった。について、次の(1)(2)に答えなさい。

- (1) 「それ」が指す内容を、本文の言葉を使って「〜こと。」に続く形になるように二十字以内で二つ説明しなさい。
- (2) なぜ「双葉」は、母に「気持ちいいね」と言ったのだと考えられますか。理由を考えて説明しなさい。

問五

D ほんの少し気持ちが楽になった。とありますが、なぜ楽になったのですか。その理由を説明したものとしてみっともふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

A 母の言葉を聞くまでは伴歩ばんぽのときに母とペースを合わせられないことを不安に思っていたが、母の言葉によって人それぞれ心地よいと思うことは異なるので、自分のペースを大切にすればよいのだと分かり安心したから。

I 母の言葉を聞くまでは自分がおじさんにかけられた言葉は正しくないと怒りを感じていたが、母の言葉によっておじさんと自分の価値観が異なっていることに気づき、おじさんを許し、受け入れようと思うようになったから。

ウ 母の言葉を聞くまではおじさんとぶつかる前後の様子を見ていた人たちが危険を知らせてくれなかったことを悲しく思っていたが、母の言葉によって他者は必ずしも自分に都合よく動いてくれるわけではないと知り悲しみがまぎれたから。

エ 母の言葉を聞くまではおじさんにかけられた言葉を真に受けてしまい傷ついていたが、母の言葉によって世の中には様々な価値観の人がいるので、自分とは異なる意見を持つ人がいることを不安に思う必要はないと気づけたから。

オ 母の言葉を聞くまでは自分と異なる価値観を持つ人と積極的に交流しなければならぬとあせっていたが、母の言葉によって自分と正反対の考え方や生き方をする人には出会わない方がいいと知り、はやる気持ちが落ち着いたから。

カ 母の言葉を聞くまでは自分と正反対の考えを持つ人がいることにショックを受けていたが、母の言葉によって母自身も正反対の価値観を持つ人に出会った経験があることが明白になり、さらに共感を得られて気持ちがやわらいだから。

問六

E そのモヤモヤとは、どんな気持ちであったことが分かりますか。へ中略3へ以降を読み、十字以上二十字以内で答えなさい。

問七

本文から読みとれる「双葉」のようすを説明したものとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何事も他者が試してからでないと安心して手を付けることができないおくびのような性格だが、一度心を決めたら、周囲の人物の助言にも耳を貸さずにつき進むがんこさがある。

イ 明るく、常に新しいことにチャレンジしようとする意欲的な性格だが、思春期特有のもやもやとした悩みがつきず、母や同級生に対してもついいらだつてしまい、なかなか素直になれずにいる。

ウ 自分の中に生まれた疑問については、納得のいくところまで考えたいというかたくなな性格だが、周囲の人物の支えによって少しずつ柔軟に考えられるようになりはじめている。

エ 自分の事に精いっぱい、周囲の人物から注がれるあたたかい愛情に気づきにくい自己中心的な性格だが、母や同級生のことを思いやり、助けようと自ら手を差しのべる優しさも持っている。

オ 積極的で、物事を前向きにとらえる性格だが、伴歩がうまくいかなかったことで自信を失い、他者からのすすめがなければ新しいことに取り組むことができないほど気弱になっている。

